

第一部

1

若者がタクシーを降りたつたのは六本木の交差点だつた。

十一月の末としてもひどく寒い晩で、それでも客待ちの空車の列がずらりと、飯倉片町に抜ける方角につらなっている。

若者を乗せてきた運転手は、滞つたその目抜きに車を突つ込むのを嫌がつたのだつた。

街は冷えきっていて、あいも変わらぬ排気ガスと喧騒、そして空々しい期待で満ちていた。終夜営業の喫茶店の前に立つた若者は、その様相に眺めいった。

陽やけた顔と、ウエスタンシャツにジーンズ、その上百八十センチ以上の長身といったいでたちでなければ、初めて盛り場に足を踏み入れたお上りさんのように映る仕草だつた。

十分近くも若者はそうして佇んでいた。

午前零時に数分を余したその時刻は、地下鉄を使って街を出ようとする人間と、これからこ

の街で遊ぼうとする人間の交差で、舗道が埋めつくされる。

特に金曜日の晩とあればなおさらだつた。

若者はやがて何事をか呟くと、信号が青に変わった横断歩道を渡り始めた。

若者が立つた角とは対角線上に位置する赤い電灯を指したのだつた。

交番の前に辿りつくまでに、若者は酔つたサラリーマンが突き出す肩をやりすごし、無遠慮に傍らをすり抜ける十代の、彼より若い少年達から身をよけねばならなかつた。

車高の低い、巨大なアメ車が耳障りな排気音をたて、タイヤを鳴らしながら右折してゆく。ヒッピーまがいの長髪の白人や日本人がちやちな細工物の装身具を路上で売っていた。

ちらりとこちらを見上げた、ジーンズにダウンジャケットを着こんだ若い女の売り子は、無表情で乾いた視線をよこしただけだつた。

媚びすらそこにはない。

交番の建物の中には三人の制服警官がいた。一人は黒い電話器に向かって話している。

残りの二人は、緊張した顔つきこそしていないものの、ガラス窓ごしの、深夜とは思えぬ人通りに視線を配っていた。

若者は交番の前に立つと、警官たちの様子を観察した。

若者の顔からは、タクシーを降りたときから浮かんでいた驚きととまどいの表情は消えていた。代わりに、決意を秘めた、厳しい面持ちになつてゐる。二十五、六か。幼なさはそこには

ない。たくまじさと、大量のエネルギーを感じさせる行動力が厚い胸板から匂った。窓ガラスに顔を寄せていた警官と若者の目が合った。若者は歩み出した。シャツの胸ポケットに右手がのび、ボタンを外す。中から一枚の紙をとり出した。警官は交番の建物内に踏み込んだ。その若者をさして興味も感じていないような目で見上げた。

「この店を、捜しているのですが」

若者の声は低くて、滑らかだった。

警官は面倒臭げにその紙片を受け取った。「麻雀荘『華』」と書かれ、その下に住所があった。

「えーと、五丁目ということはですね……」

警官は壁に貼った地図に指を走らせた。

「この道を、その角で左に折れて、最初の信号の手前に細い道がありますから、そこを左に曲がって下さい。曲がってすぐの角にあるんじゃないかな……」

警官から紙片を返されて、若者は小さく頷いた。

「ありがとう」

警官が指示したのは、タクシーが入るのを嫌がった六本木のメインストリートだった。歩いてゆく若者とほぼ同年代か年下の男女が数多く行きかかっている。

だが若者の目から見れば、彼らは一樣に幼なく華奢で、高価な衣服を身につけていた。歩道際に駐車された車も、見慣れない種類に混じって、ベンツやポルシェなどの高級車が目についたが、どれも皆、新品で手入れがきちんとなされ、激しく明滅するネオンに輝いている。

それらの車に乗りこんでいるのも、車とはおよそ釣合わない若者が多かった。中でも若者の目を惹いたのはゲームセンターだった。派手なイルミネーションと機械音、そしてずらりと並んだスロットマシン。

若者は一瞬足を止め、背後からの流れに身を押しながらも中を見つめた。

だがザラザラと、受け皿に吐き出されるコインは日本の硬貨ではないようだった。

若者は強い興味を持ったように、一、二歩足を踏み出しかけた。だが、唇をわずかの間かむと、踵を返した。

彼にとつては、まず「華」という麻雀荘に行くことが至上の問題のようだった。

ほどなく若者は、その店を見つけた。急な下り坂の途中にあり、たった一本左に折れただけで、人通りが絶える区画だった。

合成板に「華」という漢字の店名が彫られている。同名のコーラの看板は扉のわきで、既に灯を落としていた。

扉の前に立つと、若者は大きな吐息をついた。用心深く、麻雀荘の入った建物の周囲を見回す。

坂の上は、メイン・ストリートで人通りと車の音が激しい。
若者は扉のノブを握ると押した。

「どうだっ」

牌を卓に叩きつける音が鋭く耳を打った。

「いらっしやい……」

入口に近い、使用されていない卓にすわって小さなテレビを見ていた中年の女が、不審げに立ち上がった。

十卓近いテーブルのほとんどが埋まり、店の中には煙草の煙が濃く淀んでいた。

麻雀に興じている客は、サラリーマン風の男達から、銀座帰りとおぼしいスーツ姿の化粧の厚い女、そして一見してそれとわかるヤクザ者まで、まちまちだった。

客の大半は、ちらりとも新来の若者の姿を見ようとはしなかった。

若者の様子が麻雀を打ちに来たのではないことを見取った女は、若者に歩みより訊ねた。

「何か？」

若者はすぐには答えず、無言で店内を見回した。

「どなたかお捜し？」

口調だけはいねいだが、冷やかな表情を浮かべて女はいった。

「花木という男の人を捜してる。この店をやつてると聞いてた」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。